# アルツハイマー型認知症

イやなことに、年を取ると忘れっぽくなる。が、忘れっぽいだけなら、ただの加齢に伴う「もの忘れ」にすぎない。

だが、76歳のYさん。奥さんに連れられて、クリニックへやってきた。1、2年前から、忘れっぽくなったらしい。で、わざと、「どうしたのですか?」と聞くと、答えずに奥さんの方を振り返る。はい。医者は、それだけで、認知症の疑いを持ちます。さらに、「自分でも、忘れっぽくなったと思いますか?」と聞くと、「まったくない」とキレそうだ。もの忘れの自覚がないのか。「何を失礼な」、と言いたげである。「この頃、怒りっぽくなって」と奥さんは恐縮している。が、簡単にキレるのは、アルツハイマー型認知症（AD）でよくみられる易怒性によるものだ。ついでに、「ものぐさになって、テレビの前で居眠りの毎日では?」と聞くと、「好きだったゴルフもやめて」と奥さんはうなずく。自発性の低下や意欲の減退も、ADでは、早期からしばしばみられる症状である。

もの忘れのテストでは、確かに「記憶障害がみられる。時間の見当識障害もあって、日時の観念もあやふやになっている。ところが、頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査をしても、まだ、脳の萎縮は進んでいない。だが、こういうケースは稀（まれ）ではない。ADの決め手になるのは、やはり、その症状と経過だ。ただの加齢の伴うものなら、忘れっぽさは何年も進行しない。だが、家族が、「もの忘れも進んだが、なんとなく人が変わったみたい」などと言うようなら、ADの疑いが強い。

認知症を早く見付けるには、家族がまず、患者さんの日常生活の変化に気付かねば。そのちょっとした情報が、診断の役に立つ。ところで、そこのお父さんも。そろそろ、テレビを消して散歩でもしたら。観察されているよ。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：10/24北國新聞掲載）